

SORA

Travel

web magazine 2016.may. vol.72

MICRONESIA CHUUK ISLANDS

ミクロネシア チューク諸島

MAP
CLICK!

PHOTO & TEXT : KYU FURUMI



tsumi-shima tsumishima.com
ダイバーの夢をつみあげていく島



(株)ワールドツアープランナーズ
www.wtp.co.jp

© 2016
World Tour Planners Co.,Ltd.
All Rights Reserved.



はじめて目にしたこの光景は忘れられない



はじめてチュークを訪れたのが2007年のこと。その頃の僕は当地についての知識などはほぼゼロではあったが、昔からの友人でダイビング仲間である鵜口尊信が、彼の妻の裕紀と友人の横田圭介と共同で、当地にダイビングショップ「トレジャーズ」を開いたのがきっかけだった。

最初にチュークに降り立って感じた、体にまとわりつくような暖かい空気。目がくらむほど美しい海の

色。濃い空の青に映える島々の緑、スコールの後にかかる虹、夢に描いたかのような水平線の小島。豪華で特別な施設などは何もない。超素朴でも地球上で一番贅沢な光景がここにはあるような気がした。僕がこの島の虜になるのには、少しも時間を必要としなかった。そして、旧友たちと朝から一緒に潜り、合間には他愛のない話で盛り上がっているのがなんとも楽しかった。



機内から見下ろしたチュークのバリアリーフ

はじめてのチューク



通り雨のあとには虹がかかる

Travel MICRONESIA CHUUK ISLANDS

ミクロネシア チューク諸島

トレジャーズの立ち上げメンバー



いつまでも海に浸かっていたくなる心地よさ



tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく島



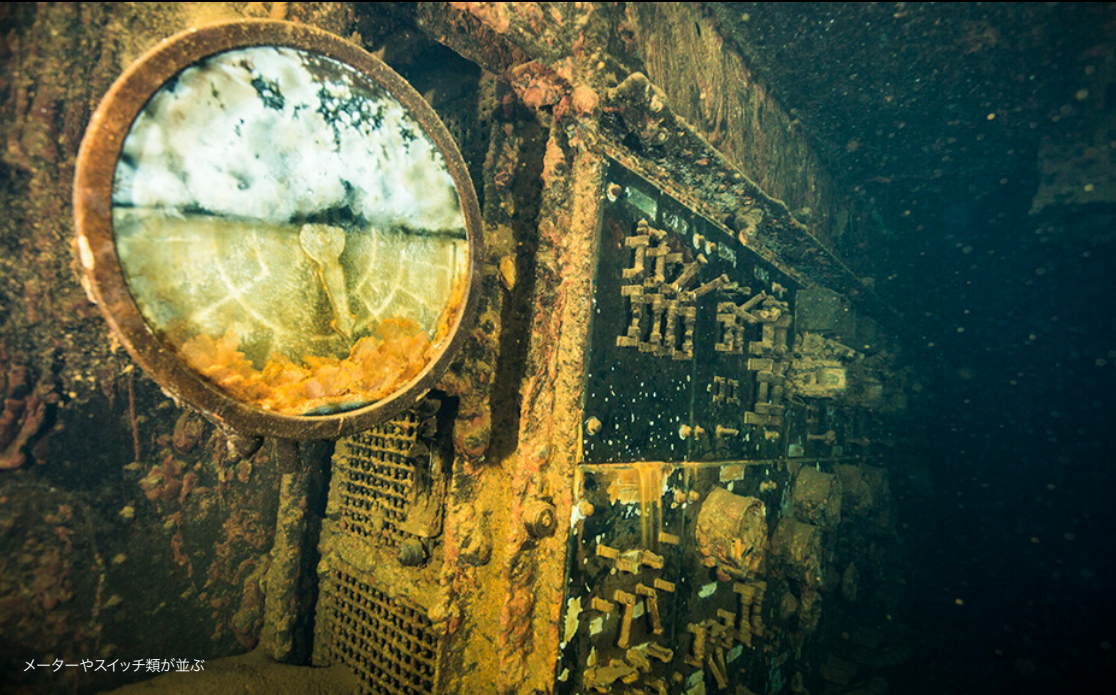
そして沈船と出会った

富士川丸の船倉に残された航空機



「なんて大きいだろう」チュークではじめて出合った沈船「輸送船 富士川丸」を目の当たりにしたとき、その一言しか出てこなかった。全長約130mの船首部分を俯瞰気味に眺めている僕は、鎮座する巨大な大砲を眺めながら呆然としていた。経験上、沈船を潜るのは初めてではなかったが、ここまで大きなものは対峙したことがなく、この大砲は敵を威嚇し破壊をするためのものなのだと理解した時の気持ちは、表現できぬほどの複雑な気持ちになった。

この富士川丸との出会いにより、言葉や知識としては知っていたものの「昔起こった悲惨な出来事」という程度にしか認識できていなかった戦争というものを、初めて深く意識するようになり、僕はいつかチュークの本を作りたいと、ぼんやりと思い描くようになっていた。



メーターやスイッチ類が並ぶ

富士川丸機室にある
コンプレッサーらしき装置



沈船と僕



倉庫に残された棚と船具

平安丸の通路には潜望鏡なども置かれている

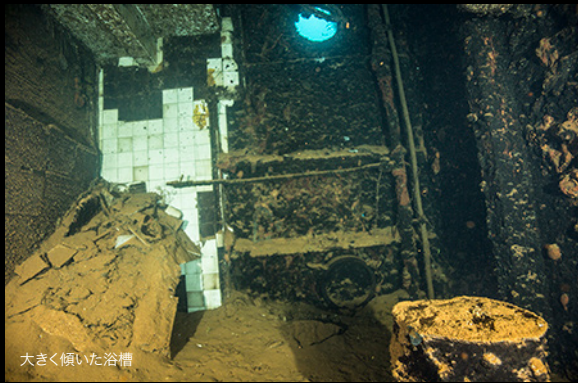


Travel MICRONESIA
CHUUK
ISLANDS
ミクロネシア チューク諸島

船内に残された雑誌の一部



大きく傾いた浴槽



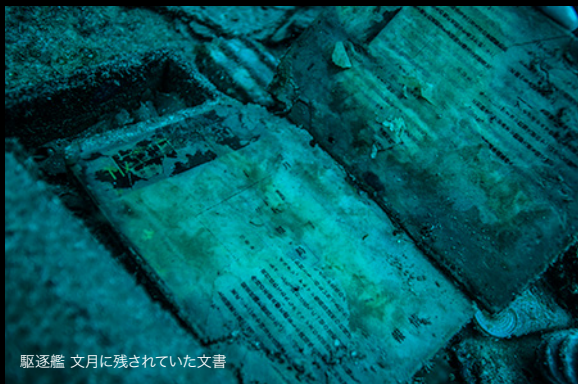
一式陸上攻撃機のジュラルミンの機体



コックピットにはキンメドキなどが群れる



駆逐艦 文月に残されていた文書



閉じ込められた記憶

富士川丸 2007年撮影



写真中央付近の煙突が倒壊した。
富士川丸 2013年撮影



チュークでの取材を続け数年が経ち、比較的撮影のしやすい浅い水深の沈船は、かなり撮影も進んだ頃だった。ある日、鵜口から「沈船が崩れてきている」との連絡を受けた。もちろん年々劣化していくのはわかっていた事でありながらも、雨風など気象の変化をほぼ受けない沈船たちは、陸上の戦跡に比べ劣化の速度は遅いと思っていたが、やはり70年という時間はあまりにも長いということなのだろうか。

これからのち、さらに多くの沈船で劣化は進んで行くだろう。約10年前からの姿を見続けてきている者として、しっかり今後の沈船たちの姿を継続して記録を残していきたい。

Travel MICRONESIA
CHUUK
ISLANDS
ミクロネシア チューク諸島

桑港丸 2009年撮影



戦車後方の鉄骨が倒壊した桑港丸 2013年撮影



崩れる沈船

追風と葛城山丸

チュークに存在する沈船の中で、特に潜るのが難しいのが駆逐艦 追風（おいて）と葛城山丸だ。

追風は春島からポートで一時間ほど北上した海原の真ん中に沈んでいるため、まずアクセスが難しく、そしてアベレージの水深が60mほどとなる。船体は中央部分から船首と船尾で二つに折れており、その両方を回ろう思うとかなりの時間が必要となる。船内は駆逐艦らしく非常に狭く、僕が侵入した際にはレコード盤や扇風機などを発見した。

葛城山丸はチュークを取り囲むリーフの北東の水路の袂に沈んでいる。そのため潮の流れが常に強く、潮止まりの時間を狙って潜ったとしても強いカレントに悩まされる事が多いだろう。平均の水深は65~70m。その水深でカレントに逆らいながら泳ぎファインダーを覗くだけで、目眩が襲ってくる。他の沈船に比べ訪れるダイバーは圧倒的に少ないためか、根付く魚も多く賑やかな光景ではあった。どちらの沈船も安全上、酸素分圧の異なるナイトロックスを複数本持ち込んでのテクニカルダイビングとなるため、経験と知識が必要となる。僕自身、これらの沈船を潜るようになってから、さらに日頃からの体調管理などにも留意し、無理をせず常に安全なダイビングを心がけるようになった。

※この二隻の沈船についてのダイビングは、トレジャーズでは受け付けておらず、現地サービス TRUK LAGOON DIVE CENTER の協力を得て撮影を行った。



闇に向かって潜行する。緊張が高まる瞬間だ

Travel MICRONESIA
CHUUK ISLANDS
ミクロネシア チューク諸島



葛城山丸の船尾付近



追風の船首。右舷を下に倒れている



追風甲板の主砲





官舎の前に不自然に現れた竹林



日本事が建てたと言われるカトリック教会



日本の名残が見える電柱



花町に続いたと言われる橋



陸上戦跡を巡る

チュークの本を作るにあたってはやはり沈船だけでは語りつくせぬと考え、2013年には朝日新聞社の取材に同行し、夏島にも上陸した。戦時中夏島には連合艦隊の司令部が置かれ、ピーク時にはおよそ五万人の日本人が暮らしていたという。同行した記者が入手した当時の地図を元に燃料タンク跡、司令部跡、公学校跡、教会、病院跡などを巡り、地図上では山本五十六長官が滞在したと記される旧家屋にも足を延ばした。

我々には見慣れた形の電柱などから、当時ここにまさしく日本人の生活があったのだと感じさせられ、この夏島訪問を機にこれまで潜ってきた沈船のなかにも、改めて人々の生活があったのだと感じるようになっていった。僕の中での大きな転機ともいえる経験となった。



燃料タンクは熱で溶けたような崩れ方をしている



夏島の病院跡と思われる土地



当時の建物記録が残る地図

夏島の燃料タンク跡

長官クラスの将校官舎と思われる

チュークの夕焼けはいつも美しい



トレジャーズの面々。
左からギャルフォン、ウミちゃん、ケイスケ



トラックの荷台は人でいっぱい



イワシが採れすぎてボートがパンパン



寝相の可愛い野良犬



少年の釣果はなかなかのもの



トラックストップホテルは
WIFI も繋がり快適



可愛いミクロネシアミツスイ



可愛い子ブタが生まれていた



野ブタと野良ネコ



流暢な日本語を話すオシエン・ベニアン。通称マサンゲさん



通学途中の子供達



漂々しい顔立ちの若者



通り雨がよく降るチューク



Travel MICRONESIA CHUUK ISLANDS

ミクロネシア チューク諸島



美しい夕焼けを見るにはトラックストップのバーがオススメ

チュークでの滞在は春島のホテルとなる。道路はボコボコしているし、食事処の選択肢も多くはない。はっきり言ってリゾート地と呼ぶのはかなり難しい。お隣のグアムが巨大都市のように感じられるほどだ。しかしながら何もないこの島の雰囲気というのが、慣れてくるとなかなか味わいのあるもので、だんだんと心地よくなってるのが不思議なものだ。基本的に町の人々も昼間にはごやかでとてもフレンドリーで、カメラを向けると自分を撮れ撮れとアピールしてくる。どこまでも素朴でどかな田舎町だ。

チュークで見る夕焼けはどこよりも美しいような気がする。黄金色から茜色に移りゆく時間は何度立ち会っても心が震える。きっと70年前にこの地にいた方々も、この美しい光景を眺めて束の間の安らぎを得ていたのではないだろうか。

そんなことを思うとこの島がたまらなく愛おしく、そして寂しくもなる。そして僕はまたチュークへ向かうのだ。

●ダイビングショップトレジャーズ
<http://www.treasures-chuukdive.com/>